

第 17 回愛媛県連盟野営大会

【抜粋】

資 料

活動の安全対策・管理について



令和6年7月20日

日本ボーイスカウト愛媛県連盟

目次

1. 夏季諸活動の実施に関して（日連発）・・・・・・・・・・・・・ 2
2. 同上「別紙」コミッショナー通達・・・・・・・・・・・・・ 3
3. 第17回愛媛県連盟野営大会参加隊安全管理マニュアル・・・・・・・・・・・・・ 5
4. 熱中症対策チェックシート
 - 1) 熱中症対策における環境整備・・・・・・・・・・・・・ 15
 - 2) スカウト達への指導など・・・・・・・・・・・・・ 16
 - 3) 活動中・活動直後の留意点・・・・・・・・・・・・・ 17
5. 松山第1隊 事前訓練資料・・・・・・・・・・・・・ 18
6. 熱中症発症時の状況記録用紙・・・・・・・・・・・・・ 19
7. KYT シートで学ぶ フィールド別安全対策・・・・・・・・・・・・・ 20
8. 第17回県野営大会実行委員会資料
 - 1) 安全管理ハンドブック・「感染症対策及び熱中症対策」付・・・・・・・・ 23
 - 2) 熱中症予防情報サイトについて・・・・・・・・・・・・・ 28
 - 3) 暑さ指数とは・・・・・・・・・・・・・ 30

1) 野営の基本と安全管理

本大会は、松山市野外活動センターの協力の下に開催されます。参加者はこのことに留意し会場内の施設の利用及び設営・撤営にあたっては、アウトドア・コード（野外生活のおきて：スカウトハンドブック 46～47 頁参考）に従って行動しましょう。

また、人に対してはセーフ・フロム・ハーム（スカウトハンドブック 48 頁参考）を、大会中は常に意識し楽しい野営大会になるよう心掛けてください。

2) 安全管理と事故防止

参加隊指導者は、キャンプ生活及びプログラム活動を通し、安全指導及び安全管理について、常に万全の配慮をしなければなりません。ほんの少しの気のゆるみから大事故につながる恐れがあることを常に意識しておいてください。

3) 健康管理・個人の衛生

参加者は、参加隊指導者の指導のもとに、健康管理（1）と保健衛生（2）に十分に留意してください。

また、真夏に開催されることから、怪我ばかりではなく、熱中症、内科系疾患（3）の発生も予想されることから、それらへの備えも大切になります。

参加者自身による健康管理として、身体を清潔にするとともに、衣類、特に下着は毎日清潔なものに取り換えることです。また、参加隊指導者による応急手当てへの備えを徹底しておくことです。

個人の救急セットの携行はもちろんのこと、隊装備品として応急処置に必要な救急キットを完備しておくことも大切です。各自、必要な常備薬は持参してください。

※指導者は参加されるスカウトの年代特性を知ることが大切です。

精神と肉体のアンバランス、未熟さとともに驚くべき成長、飽きやすさ疲れやすさが少年期の特徴です。

成長期でもあり思春期でもあるこの年代は、心（精神的・心理的）の健康にも配慮が必要です。

・健康管理（1）について

本大会における共通された健康管理票が望ましいのですが、今回の大会では個々の参加隊で作成する必要があります。 ●別紙にてその健康管理票の参考内容を記します。

・保健衛生（2）について

保健衛生とは“個人及び社会公衆の健康の保護・増進と疾病の予防”

上記にも表記された個人では着替え、食事担当者は十分な手洗い、食中毒対策・感染対策

・内科系疾患（3）について

夏は発汗が多くなり血液が濃縮し循環が悪くなり、また食事もさっぱりしたものが多くなり食欲も低下し水分の摂り過ぎから血液中の赤血球が減り貧血になりやすくなるそうです。

また、暑さなどの天候から自律神経（交感神経・副交感神経）のバランスが崩れやすい状況

に陥り、体調を崩すことが生じます(気象病との表現もあり)。

4) 野営生活において安全管理

I) 食品の扱いについて

◇食中毒予防の3原則

食中毒の大部分は細菌によるもので、食中毒を防ぐには、次の3つのことに注意します。

- ① 清潔の原則(食中毒菌をつけない:扱う前には十分な手指衛生を行う)
- ② 温度の原則(食中毒菌を殺す:料理直前まで外気に曝さない・調理では十分な加熱する)
- ③ 迅速の原則(食中毒菌を増やさない:調理は手早く行う)

▶ワンポイントアドバイス

ダーティーハンドとクリーンハンド

調理を行う時は、薪組・火起こしなどの汚れ仕事を行う者(ダーティーハンド)と、調理を行う者(クリーンハンド)に作業分担をすることにより、衛生的に調理を行うことができます。

II) テント設営・撤営とテントの乾燥

◇各作業を行う動作時に周囲の確認と声掛けを行うこと

- ① ポールの突き刺しや打撲を防ぐには
⇒ポール等長尺物の取り扱い時は作業空間の安全確認を行うこと。
- ② ポール跳ねによる突き刺しや打撲を防ぐには
⇒作業時の身体保護(帽子や手袋の着用)をして作業にかかる
- ③ ペグの打ち込み作業時の打撲やペグの引き抜き時の腰部傷害を防ぐには
⇒ハンマーのすっぽ抜け(動作時の前後安全確認)や手の保護(ハンマーの手には手袋はしない)を行うこと。
ペグを抜く時は決して中腰の体制ではしない。その場にしゃがんで、てこの原理でペグを抜くこと。
- ④ 風にあおられてのロープでの火傷
⇒風のある場での設営(撤営)は、幕体が煽られた時、ロープによる手の火傷が生じることを理解し軍手の着用をしてから行う。
- ⑤ 張り綱やペグでのつまずきによる怪我
⇒・張り綱が1本だけ飛び出るときの怪我する危険性があるので、張り綱をとめるペグは一直線に揃えること。
・夕方や夜間になると足元が見えにくくなるため、テントなどの張り綱やペグには白い布などを巻き付けて見やすくしておくこと。
・サイト内では走らないことを徹底すること。

◇テントの乾燥について

テントの湿気の防止と乾燥作業の必要性について

○湿気の原因 → 地面からの湿気、夜露、結露、雨

○湿気的作用 → 体調の変調(カビによる喘息用咳嗽、頭痛、腹痛、便秘、下痢、

不眠、発熱、)

○対策 → 昼間は扉を開け、家型ならウォールをあげる。グランドシートも乾燥、地面も乾燥させる。寝具の乾燥も大切

Ⅲ) 刃物の使い方：

◇包丁、ナタ、ナイフなどの刃物の扱いは、安全管理および実技を伴う事前訓練を徹底し、刃物による怪我を負わないように周知しておくことが大切です。

◇ナタの使い方

- ① ナタにぐらつきや目釘などに不備がないかを確認してから使用すること。
- ② ナタを持つ手は滑らないように手袋はしないで素手で握り、薪を持つ手には皮手袋または防刃手袋を着用します。
- ③ より安全な薪割を行うには、薪の上に歯を立てて置き、その背（峰）を木槌で軽く叩き刃を食い込ませて薪割を行います。
※金槌は絶対に使用しない事。
ナタの背（峰）にバリができて、スムーズな使用ができなくなります。
- ④ ナタの使用は決まった場所で使用し、保管はケースに入れて保管します。

◇ナタの渡し方は、枕木の上にナタをケースに入れて置き、それを相手に受け取ってもらうのが一番安全な渡し方になります。

手渡し時は、ナタをケースに入れて、柄を相手に向け手渡し、相手が確実に柄を握ったことを確認して手を放します。

※ナイフや包丁を手渡す時もナタを手渡す動作同様に気を付けて下さい。

Ⅳ) 野外料理について

① 火気について：炊事棟の利用

火気の取り扱い及び火災発生の予防には万全の注意を払い、消火用水は必ず準備しておくこと。

i) 風に対する注意 ii) 延焼させない注意 iii) 火傷をしない注意 iv) 完全な消火

◇かまどの火の注意

水の用意と引火しやすいものを除去すること

指導者は、スカウト達が日常生活の中で火を扱うことが少ないことを認識しておくこと
かまどの火の扱いには、以下の点を注意します。

- ① 周囲に引火しないように手近に水を用意しておくこと
- ② 火を扱う頭上に木の枝など引火しやすいものがないことを確かめること
- ③ 火の周囲直径 3 m の範囲を清掃し、燃え易いものがないようにする。特に枯葉には注意すること
- ④ 軍手または作業用の皮手袋を着けて作業する。また髪の毛を保護のため帽子を被ること。
- ⑤ 風向きに注意し、風向きの変化で火をあおられて火傷しないようにすること。
- ⑥ 火の当番を決め、火の当番は火からは離れないこと。

- ⑦ 火の周辺ではふざけないこと。
- ⑧ 火の点火後、燃えにくいからとガソリン等を注ぐことは絶対位にしないこと。
- ⑨ 残り火から再燃することのないように完全消火を行うこと。

② 食品について：食材は配給

野外での炊事、野生動物による食品被害を防ぐ対策を必ず行うこと。

③ 水の使用について：炊事棟での利用

松山市野外活動センターでは、水は貴重な生活必需品であり、私たちだけが利用するものではない。状況によっては濁水になりやすいので無駄のない使い方をする事。

例】炊具・食器の洗い方の工夫：水は貴重品

バケツを3つ用意

1つ目は、洗剤の入った「洗浄用バケツ」

2つ目は、1を濯ぐ「すすぎ用」バケツ

3つ目は、2の残った洗剤を更に落とす「仮仕上げ用」バケツ

◇炊具や食器の乾燥、それは細菌の繁殖を防ぐため

- ① 水気は布巾（ペーパータオル）で拭いて乾燥させる。
- ② 乾燥は天日を利用

V) 自然環境について・・・大会本部が避難指示をすること、その基準を設定し参加者に周知が必要

指導者は、日頃から可能な範囲で、気象情報を把握する習慣を付けておくことも大切です。

・『注意報とは』、気象によりその地域に被害が出る恐れがあると予測される場合に発令される。

・『警報とは』、気象によりその地域に重大な被害が発生する恐れがある場合に発令される。

◇注意報が出た時は、指導者はプログラム内容とスカウトの能力等を総合的に判断し、その

後の対応を判断すること。警報の場合は、直ちに活動は中止し安全な場所へ避難の事。

常に活動中の有事に備え、避難場所を周知しておく事が大切です。

※地域には、指定（緊急）避難場所として

- ①広域避難場所
- ②一時避難場所
- ③津波避難ビル・水害時避難ビル

があるので、ハザードマップや下見をしたときに必ず把握しておく事が大切です。

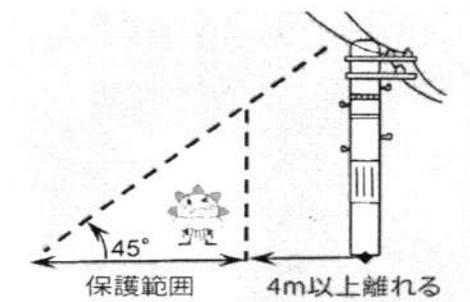
◇ゲリラ豪雨への対応

ゲリラ豪雨（局地的大雨）をもたらす平均的積乱雲の大きさは約10kmほどであり、積乱雲による集中豪雨はせいぜい30分程度で弱まる可能性が高いので、突然ゲリラ豪雨に遭遇した場合は、安全な建物に避難しやり過ごすことが大切です。但し、想定以上の大雨になる時は浸水の可能性もあるため、低地から離れることが大切です。

◇落雷に遭わない行動

落雷は、雨が降る前に発生し落雷するために、激しい雨が降り出してからの避難では間に合わないことがある。雷の音を聞いたら避難行動を取ること。

近くに安全な空間がない場合は、電柱、煙突、鉄塔などの高い物体のてっぺんを45度以上の角度で見上げる範囲で、その物体から4m以上離れたところ（保護範囲）に対比します。高い木の近くも危険ですから、最低でも木のすべての幹、枝、葉から2m以上離れましょう。



スカウトハンドブック ベーシック 「雷から身を守る」78頁 参照

◇地震への対応

活動中、地震にあった場合は、先ず火を消すこと。そして森林、竹林に逃げるのが安全です。

但し、その場所は平地でなければ安全とは言えません。傾斜地での竹林では竹林ごと滑り落ちる危険性が高まります。平地に避難することが賢明です。

VI) 有害動物の被害に遭わないために

野外には、毒を持つヘビ（マムシ・ヤマカガシ）、猪、サルなどがいる。また夏場はスズメバチもいます。むやみに近づき興奮させないようにすることが大切です。

小動物に咬まれた場合は必ず医療機関を受診しましょう。

① マムシへの予防と対策

マムシの攻撃性は低く、積極的に人を襲うことはありません。50cm以上離れていれば咬まれることはありません。しかし、誤って踏んだりすると咬まれることがあります。

草むらなどを歩く時は、棒でつつきながら進むこと。足下やふくらはぎを保護できる服装で活動することも大切です。

② ヤマカガシへの予防と対策

昭和59年9月にヤマカガシに咬まれ死亡事故が起きています。ヤマカガシには毒牙はありませんが、咬まれると口の奥にあるデュベルノイ氏腺から猛毒が出ます。指先を咬まれる場合は毒が入り危険です。

ヤマカガシは平地から山地に広く生息しています。尻尾をもって振り回したりする

と咬まれます。攻撃性は低いですから決して触らないこと。

③ スズメバチへの予防と対策

蜂の被害が多いのは、8月から10月です。

少雨・猛暑の時は巣づくりが容易で、餌になる昆虫も多いため大量発生する可能性があります。平成13年には、キイロスズメバチが例年の10倍発生したことも記録されています。

クヌギ、コナラ、榆やブドウ、ナシなどの樹液や果実を好むらしいので近づかないこと。

黒いものを攻撃の対象にしますので、黒い服装はさけ、髪にも攻撃しますので白い帽子を被ることが対策の一つになります。また、カルピスウォーターなどを山では飲まないように気を付けることも大切です。飲みかけた缶の中に潜っていて、缶を口にしたとき唇を刺された報告もあります。

④ ニホンアナグマ・タヌキ・イノシシなどは松山市野外活動センターにも生息しています。決して刺激して興奮させないことが第一です。

◎安全対策について

事前訓練や各隊での集会で、野外活動におけるKYTシートでの安全教育を行うことも大切なことと考えます。

・令和6年度の三坂野営訓練では、設営前にKYTシートを利用し安全教育を実施しました。

◎健康管理について

◇熱中症は温度や湿度が高い環境で、体内の水分やミネラルのバランスが崩れ、体温調整がうまくできず、熱が体内にこもった状態で、めまいやだるさ、吐き気などを引き起こします。

熱中症を予防するためには水分摂取だけではなく、十分な栄養補給、休息や睡眠によって元気な体を維持することが大切になります。そうした点に留意し健康管理の確認を以下に記します。

1)野営時の健康管理チェックについて

スカウト達が回答しやすいチェック項目が必要と考えられる。

A)昨夜の睡眠時間について:自宅での睡眠時間と比べ回答できるように配慮しました。

- ① 自宅と同じようによく眠れている ② 自宅のように眠れない

※睡眠不足は熱中症発症への引き金となります。

睡眠不足に伴う随伴症状・自覚症状の確認を行います。

頭が痛い・眠気がある・食欲がない・倦怠感がある(しんどい・体に力が入りにくい)

気分が乗らない など 状況によってはプログラム活動は中止して、救護所で休息する必要があると判断する場合があります。

B)排便・排尿について:ここでも自宅での生活と比べて回答できるように配慮

排便 ① 排便はある ② 排便がない →最終排便は 月 日 時頃

※便秘が長引くと集中力に欠ける場合があります。

排尿 ② 排尿は自宅と同様にある ② 午前1回・午後1回の排尿がない

※排尿については、起床後にあり、その後、午前中に1度は排尿があるのが望ましい。

昼食時まででないのは脱水傾向と考えられます。熱中症には要注意となります。

昼食摂取後、次のプログラムまでに排尿なければ十分な水分補給を行わせませす。

c)食事量について:ここでも、自宅と比べて食事摂取量の回答ができるように配慮

- ①自宅と同様に食べている ②自宅より少ない・食欲がない

※水分同様、食事摂取量も熱中症の発症に影響します。

しっかりと正確な情報(食事量と体調)が大切になります。

朝食・昼食・夕食の摂取量の状況を指導者は把握し、食事状況によってはその食後のプログラム参加へ是非を行う判断が必要となります。

夏野菜の代表野菜、きゅうりには水分96%、ビタミンCやカリウムも豊富。

塩もみして食べることで熱中症対策の簡単に口のできる代表野菜になります。

1) 熱中症対策における環境整備

令和6年 月 日 時 分確認

<input type="checkbox"/>	活動前に活動場所における暑さ指数などにより熱中症の危険度を把握できる環境を整える。
<input type="checkbox"/>	危機(安全)管理マニュアル等で、暑熱環境における活動中止の基準と判断者及び伝達方法を予め定め、関係者間で共通認識を図ること。 ※必要な判断が確実に行われるとともに関係者に伝達される体制作りをおこなう事。
<input type="checkbox"/>	熱中症事故防止に関する研修等を実施する。 ※熱中症事故に関わる対応は本大会実行委員・奉仕者・参加隊長に関わる全ての者が共通認識を持つことが重要である
<input type="checkbox"/>	スカウトの中には、暑さや野営などに慣れていない者も多く、熱中症事故のリスクは高いことを 認識し、暑さ指数を確認しながら無理の無い活動計画とすること。
<input type="checkbox"/>	活動中やその前後に、適切な水分などの補給や休憩ができる環境を整える。
<input type="checkbox"/>	熱中症発生時(疑いを含む)に速やかに対処できる体制を整備する。 ※重症の症状(意識障害やその疑い)があれば躊躇なく救急要請・全身冷却(水道水散布法)・AEDの使用も視野に入れる。
<input type="checkbox"/>	熱中症事故の発生リスクが高い活動の実施時期・活動内容の調整を検討する
<input type="checkbox"/>	本大会のように指導体制が普段と異なる活動を行う際には、事故防止の取り組みや緊急時の対応について事前に確認しスカウト達とも共通認識を図る。
<input type="checkbox"/>	保護者に対して活動実施判断の基準を含めた熱中症事故防止の取り組みなどについて情報提供を行い、必要な連携・理解醸成を図る。
<input type="checkbox"/>	環境の向上を図るために、施設・設備において、日差しを遮る日よけの活用、風通しを良くするなどの工夫を検討する。

2) スカウト達への指導など

令和6年 月 日 時 分確認

<input type="checkbox"/>	期間、野営生活に送るにあたり就寝前・起床後にはコップ一杯の水分を取ること。 また、活動時、その前後も含めてこまめに水分を補給し休憩を取るよう指導する。 ※活動中でなくても、水分補給
<input type="checkbox"/>	自分の体調に気を配り、不調が感じられる場合はためらうことなく、そばにいる指導者（隊長・副長が常に行動を共にしないので、周囲にいる指導者に申し出るよう指導しておくことが大切）
<input type="checkbox"/>	大会期間中の服装は、帽子等により日差しを遮るとともに通気性・透湿性の良い服装を選ぶよう指導する。
<input type="checkbox"/>	活動を終了後は、十分にクールダウンするなどして、体調を整えたうえでその後の活動を行うよう指導する。
<input type="checkbox"/>	活動の際には、気象状況や活動場所の“暑さ指数”(WBGT)を確認し、無理のない活動行動を行うよう指導する。
<input type="checkbox"/>	スカウト達同士で、水分補給や休憩、体調管理の声掛けを行うよう指導する。 ※特に班長及び安全係は班員の体調管理を常に確認する。
<input type="checkbox"/>	今回の野営大会のように、普段と異なる場所などで活動を行う際は、事故防止の取り組みや緊急時の対応について、事前に隊指導者と共通認識(些細な事でも報告できる雰囲気・環境)を図る。
<input type="checkbox"/>	体調不良のときは、スカウトたちが勝手な判断することなく、プログラム中にはプログラム担当スタッフへ、サイト内では隊指導者へ報告すること。

※不調を感じるとは・・・

顔の火照り・立ちくらみ・吐き気・頭痛・四肢や腹部のこむら返り・倦怠感 など

いつも感じたことのない(違和感)症状、我慢していると取り返しがつかない状況に陥ります。

3) 活動中・活動直後の留意点

令和6年 月 日 時 分確認

<input type="checkbox"/>	暑さ指数により活動の危険度を把握するとともに、スカウト達の様子をよく観察し体調の把握に努める。 ※プログラム担当者・隊指導者は共通認識を図ることが大切。
<input type="checkbox"/>	体調に違和感がある際には申し出やすい環境づくりに留意する。
<input type="checkbox"/>	スカウト達の発達段階によっては、熱中症を起こしても、「疲れた」等の単純な表現のみで表すこともあることに注意する。
<input type="checkbox"/>	熱中症発生時(疑いを含む)に速やかに対処できる体制を整備する。 ※重症の症状(意識障害やその疑い)があれば躊躇なく救急要請・全身冷却(水道水散布法)・AEDの使用も視野に入れる。
<input type="checkbox"/>	プログラム活動の指導者は、スカウト達の様子やその他状況に応じて活動計画を柔軟に変更することも視野に入れておく。
<input type="checkbox"/>	活動プログラムにおいては、運動強度・活動内容・継続時間の調整はスカウト達の自己管理とせず、指導者等が把握し適切に指導する。
<input type="checkbox"/>	スカウトが分散している場合は、緊急事態の発見が遅れることもあるため、特に熱中症リスクが高い状況での行動には注意する。
<input type="checkbox"/>	活動を行った後は体が熱い状態となっているため、クールダウンしてから、次の活動を行うように指導する。